

第一夜に

東京の真ん中でオトちゃんはひっそりとバーテンダーをやっていた。毎晩、小さな店のカウンターの中に、空色のTシャツを着てぼつんと立っている。オトちゃんの雇い主は店が入っている小さなビルのオーナーだった。

オトちゃんは言葉をうまく話すことができない。小さい時に二週間続いた高熱のせいで脳に障害を持ったそうだ。言葉を探し出してから話をするので、会話がぶつぶつと途切れしてしまう。話し出しても、どもることが多かった。

作った酒のほうは、うんと悠長に語りかけてきた。ちりちりと胸を焦がして、みぞおちあたりにずっしりと酒のすこみをしみ渡らせる。一度、オトちゃんのジン・トニックを飲

んだら、ほかは子供用のジュースにしか思えなくなるくらいだ。ビールやワインもその手にかかると、魔法のように柔らかくうっとりとしてグラスにおさまることになった。ふだんの混み具合はまちまちだが、週末になると、店は窓ガラスが曇るほどの熱気で客があふれかえった。

それでも、オトちゃんはぼつんとカウンターの中にいた。まるでオトちゃん自身が完成されたひとつの生態系のように、ただそこに、静かにたたずんでいる。俺たちに酒を作ってくれる時、オトちゃんは薄いカーテンの奥からちよつとだけ姿を現す。用事が済むとすぐにカーテンの向こう側に行ってしまっ、丸いシルエツトがぼんやりと浮かび上がるだけだった。

俺がオトちゃんに初めて会ったのは、三年前のことだ。

六月の末、空は何日も粘り強く泣き続けていて、じゅうたんにしみ出した風呂の水のように、鬱屈した気分がじわじわと体の中に入り込んでいた。

その日、俺は重い足を引きずりながら、予備校の仕事を終えて、アパートに帰ってきた。ふらっと世界旅行に出かけてしまった同僚の穴を埋めるために、もう何日も夜中近くに家に帰る日が続いている。シャワーを浴びてベッドに倒れ込む。しばらくして、部屋の中が